

「一票の力」

宮崎市 柳生 麻衣

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられてから、3年が経ちました。若者の投票率は、他の世代に対し、低い水準のままであるというのが現状です。友人の間でも、「選挙に行く?」「いや、私は行かない。」などという会話を耳にします。

私は、選挙へ行き一票を投じたことで、自分の世界を広げることができました。私は、高校三年生の冬に選挙権を手に入れました。

選挙権を得て、初めての選挙は地元の市長選挙でした。その当時の私は、「選挙へ行っても自分の一票で何も変わらない」「政治なんて遠い世界のこと」と思う気持ちがありました。

しかし、その日の夜、開票速報のニュースが始まった時に、私の中で何かが変わった気がしました。それまで政治や選挙にあまり興味、関心がなかった私が、自ら開票速報のニュースを見ていたのです。

これは、選挙に行き、自分の手で投票したことによって有権者であるという自覚が芽生え、政治に興味や関心が自然と湧いた結果であると考えました。

有権者が持つ清き一票は、意思表示をする上で大切であるとよく耳にします。

しかし、私はそれだけではないと感じました。有権者が持つ清き一票は、意思表示をするためだけではなく、政治や選挙への興味や関心を持つきっかけにもなると「一票のもつ力」を身をもって感じました。

私は、幼い頃からの夢である助産師になるために、大学へ進学し日々の勉強を頑張っています。政治に関心をもつようになってからは、新聞に目を通すことも増えました。ある日、いつものように新聞を読んでいると、私の目に衝撃的な記事が映りました。

それは、2017年8月に西諸地域で産科医と助産師不足による産科病棟閉鎖という記事と、2019年の4月に串間市で唯一、分娩を扱ってきた産婦人科が、産科医、助産師不足により妊婦や出産の受け入れを中止するという記事でした。

私は、これらの新聞記事を見たときに、深刻化していく宮崎県のお産体制を新聞記事を通して見ることしかできない自分に悔しさを覚えました。

産科医、助産師不足による産科病棟の閉鎖は、妊婦やその家族に負担がかかるだけではないと思います。地域の産科病棟が閉鎖すると、その地域から次第に若者は減少し、やがて人口の減少そして、地域の過疎化が生じるのではないかと考えました。

このような負の連鎖を断ち切り、地域の人々が安全で安心して暮らすことのできるような街にするために、地域の人々の声を聞くことのできる「選挙」があり、「政治」があるのだと思います。

宮崎県のお産体制は、日々深刻化しています。

今こそ地域の人々の声が反映される「選挙」そして「政治」に頼るべきではないでしょうか。

地域の人々が安全で安心して暮らすことができ、いつまでも人の心が暖かく、笑顔のあふれる宮崎県、そして日本をつくっていくのは、有権者である私たちです。

私は、有権者として、より安心、安全な住みよい街になるように清き一票を投じ続けます。

選挙権が自宅に届いたら、まずは一票を投じてみて下さい。それが有権者への第一歩です。そして、私は地域が一丸となって、安全、安心で笑顔のあふれる住みよい街を現在は有権者の視点からそして、将来は助産師の視点も加えて、つくっていきたいです。